

本書の効用

たしかに、 語学の天才はいます

黄熱病や梅毒の研究で知られる細菌学者の野口英世博士は、知る人ぞ知る語学の達人でもあります。

野口英世 24 歳、はじめて渡米するために乗り込んだその船内で、彼はシェークスピアの『ヴェニスの商人』を一心に読んでいました。1900 年（明治 33 年）のことです。

当時は、現在の日本とは比べ物にならないほど教材もネイティブスピーカーも少なく、乏しい語学学習環境にありました。日常会話のテキストも、お手本となる英語の音声もおいそれとは手に入りません。ただ、数は少ないにせよ、英語で書かれた医学書や英文書籍は日本でも入手できたはずです。にもかかわらず、野口青年が渡米に際して船内に持ち込んだのは英國文学の古典、シェークスピアだったのです。

米国生まれの私の立場に置き換えますと、現代日本に留学しようとすると、村上春樹ではなく『源氏物語』を一心に読み込んでいのと同じことです。

奥村鶴吉編による『野口英世』によると、渡米に同行した同僚に「何か現代のものを読んだほうがいいのではないか」と問われた野口青年は、「古くともシェークスピアの英文は、代表的なものです。先づ我々は、古いものを初めから読むほうがいいと思います」と言ったといいます。

野口英世 24 歳。英語圏に行ったことのない青年が、東北の山あいに位置する会津から上京してまだ数年、医術を志し、英語圏に乗り込んで医術を極めんとするときの言葉でした。

果たして彼は、渡米直後から英語の読み書きには全く苦労しなかったといいます。そして、米国人を感嘆せしめる論文を次々と著しました。

また、23 歳の野口青年が渡米の前年に医師隊隊員として清国に渡った際は、清国に向かう船の中で中国語を勉強し、同行した誰よりも達者な中国語を操り官吏との交渉にあたったそうです。さらには、たった 5 カ月間の清国滞在中に、なんとロシア語も話せるようになっていたといいます。 (参考: 斎藤兆史『英語達人列伝』)

たしかに、世界には、このようなごくひと握りの語学の天才が存在します。しかし、私たち大多数の普通の人はそうはいきません。

格好良くて楽な 語学習得の方法なんてありません

私は米国で生まれ、プリンストン神学校大学院入学後日本に興味を持ち始め、卒業後さらにハワイ大学で日本と日本語について勉強しました。ハワイ大学時代は毎日 6 時間の日本語学習を 1 年半ほど続けました。

そして「日本に行こう！」と決意し、27 歳のときに訪日します。しかし、日本に来てみると、あれほど勉強したはずの日本語もさっぱり通じません。日本の皆さんのが親切にお声をかけてくださる言葉もあまり理解できませんでした。

はじめは数年ほど仙台に住んでいたのですが、アパートの隣のおば

さんに「あんだしゃあ、どっからきたの」と聞かれ、「あんだしゃあ」がわからずに面食らってしまったことを覚えています（仙台地方の方言で「あなたは、どこから来たの」という意味でした）。

こんなことでは話になりませんから、「使える日本語」を身につけられるように力を注ぎました。

効果的だったのは、毎日の日常会話を収録したテキストをとことん学習することでした。

「丸の内ビルは、どこですか」

「昨日は、友達と居酒屋に行きました」

といった例文を覚えることで、1つ1つの文法（文型）を身につけていきました。

「例文を覚える」とひと言でいっても、そこには習得レベルにいくつかの段階があります。読んで意味がわかるだけでは習得したこと（使えること）にはなりません。

話せるようになるまでには、大まかにいって、次のような段階があります。

読んで意味がわかる



聞いて意味がわかる



自分で発音できる



自分で暗唱できる



同じ文型の文を、言葉を入れ換えて使える



自分で発話できる

当時の私の日本語レベルは、現在の多くの日本人の英語力と同じように、「読むことはできる。録音したようなきれいな言葉なら聞き取ることができる」というレベルでした。

ではその改善のために何をしたか。

毎日2時間、来る日も来る日も日本語テキストの朗読音声を聞き、声に出してトレーニングをしていました。トレーニングには大学のLL教室を使いました。LL教室なら、OA機器が現在ほど発達していない当時でも、お手本の音声を、自分のタイミングで止めたり巻き戻したりして、自由に聞くことができたからです。

そのときの手順は以下のとおりです。

例文を朗読した音声を聞く



例文の意味を理解していることを確かめる



もう一度音声を聞く



例文に続いて、自分で発話する

その際、テキストは見ません。できなかったら、できるようになるまで、繰り返し聞いて覚えます。完全に暗記したら、

「宮城県は、どこですか」

「おとといは、先生と居酒屋に行きました」

というように、自分で単語を入れ換えて練習します。

「2時間」とひと言でいうと簡単に聞こえますが、いくら外国語と

はいえ、こんな単純な例文をひたすら唱え続けることは大変に骨の折れる作業です。1つの文を音読するのに5秒もかかりませんから、2時間続けると相当な量になります。聞く時間などを割り引いても、1000回弱、繰り返しセンテンスを言い続けるわけです。

ところが、音読はつらいだけではありません。実は、不思議なことに、音読を続けると楽しい気持ちになってきます。東北大学の川島隆太教授の研究では、「音読を続けると脳の前頭前野が活性化する」というものがあります。脳科学的に見ても、音読はたくさん脳を使う「脳のエクササイズ」であるということもできるのです。

音読で脳の運動をすることによって、「ランナーズハイ」のような状態になるのでしょうか。

ともかく、実際に試していただければわかるのではないかと思いますが、はじめ苦痛でも、次第に気持ち良くなってくるのです。

私は、このトレーニングを約4年間続けました。

ただし、4年続けなければ結果が出ないわけではありません。このトレーニングを始めて3カ月くらいすると、みるみる効果が出てきました。**耳に、口に、脳に**、日本語が染み込んでくるのです。そして、語学を扱う脳の部位に、日本語の回路が作成される感覚を覚えます。脳の言語にまつわる領域が、「日本語対応」できるように変わったのです。耳の裏側あたりにある、言葉を理解するウェルニッケ野だけではなく、言葉を口に出すときに働くブローカ野、そして口や顎の筋肉を動かす部位、それらの言葉に関する領域が反復トレーニングによって手を結び、そのつながりが強化されていくのです。

一度その「回路」ができてしまえばしめたもの。最初は難しく感じたトレーニングでも、無理なくできるようになります。自らの好奇心の赴くままに、言葉のインプットとアウトプットができるようになっていくのです。

つまり、外国語でのコミュニケーションができる実感を得られるようになってきます。外国語でのコミュニケーションは、予想以上に楽しいものです。

トレーニングする



コミュニケーションできる



もっとトレーニングする



もっと深いコミュニケーションができる

という、上達のスパイラルに入っていきます。

英語だって

同じです

これは日本語学習だけにあてはまるではありません。英語学習だって同じです。

英文法や語法を、頭だけで理解する「スマートな勉強」をしても、使える英語は身につきません。

また、「ただ聞き流すだけ」「睡眠学習で英語を習得」……など、楽な方法で英語が自然にできるようになることも決してありません。

勉強ではなくトレーニング。

これが語学学習の大前提です。野球の理論だけ完璧にマスターしても、バットを振らなければボールには当たらないように、英語が読めるからといって口を動かすことをしなければ、ぜったいに話せるようにはなりません。

以前、全国トップの進学校の1つである筑波大学付属駒場中学・高校で、中学生クラスの英語の授業を見たことがあります。当時そこで行われていたのは、「**音読**」と「**暗唱**」のトレーニングでした。生徒が明朗に発音しながら先生のあとに続いて音読する光景は、さながら**運動部の基礎練習**のようです。授業の前半半分はそのトレーニング、後半は取り組んだテーマに関する英語での発表でした。中学生が、教科書のテーマについて、自分なりに英語で発表するのです。いくら優秀な生徒さんたちが集まっているとはいっても、授業を受けているのは本当は優秀な高校生ではないかと見紛うほど、英語も内容もすばらしい発表でした。

さすがは「筑駒」！ともいえる反面、その「使える英語力」の大きな要因は、徹底した音読指導にあったのではないかと思います。つまり、優秀な頭脳が集まる学校でも、「語学は考えて勉強するものではなく、目も口も耳も使った反復トレーニングが一番の王道なのだ」という考えが徹底されていたということです。

ルールではなく、 パターンを体で覚えよう

大学生を教えていて気がついたことですが、日本の英語学習者は、ルールだけを覚えてなんとか近道しようとしているように見えま

す。たしかに数学ならば、公理や定理、公式をきちんと理解していれば応用が利くでしょう。しかし、使える英語を身につけるためには、それは近道ではなく、遠回りになります。

子どもは、母親の言葉を何百回も聞き、だんだん言葉を理解していきます。そして、言葉の真似を繰り返すことでパターンを身につけます。「何が主語（S）で、何が動詞（V）で、何が目的語（O）か」などと考えながら覚えているわけではありません。

もちろん、「成人してからの語学学習も、赤ちゃんと同じ方法ですべし」といっているのではありません。「言葉を読む」際には、ある程度ルールを覚えたほうが助けになります。

しかし、英語を使おうとするとき、つまり英語を自ら発信しようとするときに役立つのは「ルールの知識」ではありません。何度もトレーニングを繰り返して体に覚え込ませた英語の基本センテンス、つまり**「英語のパターン」**なのです。それは、考えなくとも自然と口について出てくるほどに自分のものとなった**「英語のパターン」**です。

もっといって、様々なパターンを覚えれば文法のルールは勝手に身についてくるものです。もちろん、自分のものにしたパターンが多ければ多いほど、パターン同士を有機的に結びつけ、豊かな文脈を自らつくることができます。

第一、英語には、法律や科学や数学などとは違い、「論理的にきっちり割り切れる 100% 完全なルール」など存在しません。遠回りなようですが、センテンスごとのパターンで覚えることが、生きた言葉のネットワークを縦横につなげ、自分の脳内に**確固たる英語回路を構築すること**につながるのであります。

繰り返しになりますが、「これまでの日本の英語学習者に絶対的に足りないもの」、それはアウトプットのトレーニングです。読むことだけでは使える英語は身につきません。

入れたものは出す。インプットしたら、アウトプットしなければなりません。

筆者が教える大学でも、「難解な英語を多く読むことを苦にしないが、簡単な英語の日常会話さえできない学生」で溢れています。つまり、これまでの日本の英語学習は、あまりにもインプットに注力しすぎていて、出し入れのバランスが崩れている状態にあるのです。

野球でも水泳でもサッカーでも、スポーツ理論だけ学んでも実践トレーニングをしなければちっとも上達しないのと同じです。

それは、多くの学生だけなく、多くのビジネスマンにも共通していることです。つまり、日本のこれまでの英語教育では、英語を話すためのトレーニング、つまり英語のアウトプット・トレーニングの機会が圧倒的に少なかったのです。

ですから、学校で真面目に英語学習に取り組み、難解な受験問題を解き、難関大学に入学する力があったとしても、実際にコミュニケーションを図るために最も重要な、自分の考えを英語で伝えることができないのです。

話せるようになるための 英文法テキスト

本書の目的は、英語を使えるようになることです。つまり、自ら発話できるようになることです。本書はそのためのアウトプット・トレーニング専用の英文法テキストになっています。

テキストの特長は次の2点です。

本書の特長

- 話すために必要な
① 英文法の基礎が網羅されている
- ② 英語ネイティブがリアルによく使う
フレーズだけでつくった

本書の特長①

日本の英語教育で教えられている英文法は、膨大です。論理的に、精緻かつ詳細に、日本語で解説されていますが、英語ネイティブスピーカーの私から見ますと、残念ながら、コミュニケーションをする上で必ずしも必要でない項目が、少なからず入っています。

たとえば、日本の学校では、次のような問題演習がされています。

▶ 次の英文を、受動態（受け身形）を使った文章に書き換えなさい。

My neighbor will take good care of my cat while I am away.

（私が留守の間、隣人が飼い猫の面倒を見てくれます）

いかがでしょうか。

正解は、Good care will be taken of my cat by my neighbor while I am away. ですが、この英文は「文法的に正しくとも」ネイティブが使うことはありません。

これは、受け身形の勉強をするための演習ですが、私から見ると全く意味をなしていないと思うのです。

また、「未来完了形」もネイティブはほとんど使いませんから、あまり重要な文法ではありません。頻出の文法をすっかりマスターしてから、自然と覚えていくべきもので、少なくとも簡単な日常会話もできない学習者が学ぶべきことではないのです。

冠詞も、はじめから全部覚えるのはばかばかしい話で、間違えやすいものから覚えて、何年かかるってでも、最終的にすべて身につけるのが得策でしょう。それは学びの喜びにもつながります。

間違いのない文法で話せることが理想ですが、はじめから完璧を目指すのは無理ですし、その必要もありません。

少し考えてみると、正しい文法で話すことなど、たとえそれが母語であってもとても難しいことがわかるはずです。

読者の皆さんのが、日本語で会話をするとき、会議やプレゼンテーションで発言するとき、それを録音して聞いてみると、いかにデタラメな文法で話しているかよくわかります。でも、正しい文法で話していなくとも、その場のコミュニケーションではきちんと意味は通じているでしょう。

母語でさえこうなのです。ましてや、英語は外国語なのですから、多少の文法の間違いなど、全く気にする必要などありません。

たとえば、“She speak a little English.” は、3人称の主語に対しても動詞 speak に -s がついていないので文法的に誤りであり、正しくは “She speaks a little English.” ですが、“She speak a little English.” でもちゃんと意味は通じます。

それよりも、「自分の言いたいこと」を持ち、その内容をいかに伝

えるか。そこに重きを置くべきです。

はじめから「未来完了進行形」が必要だ、とか、「仮定法」を使いたいから動詞を過去形にしなければならない、などと考えていては、いつまでたっても発話できるようにはなりません。

英語学習においては、完璧主義は捨てましょう。よくいわれることではありますが、間違いを恐れずに、とにかく口に出すことが大切。実践が一番です。

そのために必要な「話すための英文法」をまとめたものが本書のテキストです。

ただし、読んで理解するだけでは意味がありません。

「自ら口に出して暗唱できる」

「単語を入れ換えた文章が言える」

というレベルまでトレーニングすれば、必ず自分から英語の言葉が出せるようになります。

本書の特長②

本書のテキストは、「使える文法から優先して身につけること」を第一として作成しました。

せっかくトレーニングして身につけるのですから**すべて使えるもの**でなくてなりません。

他書の批判をすることは良いことではありませんが、多くの学生や学習者が使っているテキストを見ると、「たとえ文法的には正しくとも」、ネイティブも学習者も、おそらく一生使わないであろう例文がときどき見られます。時には、子どもっぽすぎる例文だったり、あるときには硬すぎる例文だったり、という具合です。

それを避けるため、本テキストは、ネイティブが普段使っているフレーズだけを厳選しています。日本滞在が長い筆者は、このテキストを作成するため、アメリカに帰省するたびに、日常場面でよく耳

にし、テキストになり得る表現を書き溜め、吟味した上で掲載しました。

ですから、本当に英語を使えるようになることが目的ならば、日本語で書かれた日本語の説明が長い英文書を全部覚えるのではなく、日常的によく使う、頻度の高いパターンをまとめた本書の英文を身につけることが一番の近道となる、と自信を持っていえるのです。

本書のテキストは 決して「簡単」ではありません

本書のテキストは、短文で、しかも難しい単語を使っていませんから、一見すると簡単すぎるよう見えるかもしれません。

なぜそのような短文にしたのか？

その理由は、これまでにほとんどアウトプット・トレーニングをする機会がなかった日本の学習者にとって、長い英文を覚え、暗唱するのほとてもハードルが高いからです。

例文を聞いて、それを真似するように暗唱すること（リッスン＆リピート）がトレーニングの基本となります。たとえ簡単な例文でも、文章が長くなると、慣れていない学習者は、リピートできなくなってしまいます。

その点、本書の例文の長さであれば、英語のアウトプットに慣れていない学習者であっても、暗唱することが可能です。例文のほとんどは7ワード前後の単語でできているのですが、これはヒトの記憶が「7±2」の事柄ならスムーズに記憶できるようにできているからです（これを「マジックナンバー7」といいます）。

そうかといって、本テキストは決して「簡単」なわけではありません。

「わかること」と「使えること」は全く違うからです。

テキストをひと目読んで理解することはあたりまえ。繰り返しになりますが、本書の目的はそこにあるのではなく、テキストをすべて「出し入れ可能」なレベルまで身につけることにあるのです。

また、ただ闇雲に覚えるだけでなく、ひと目でその項目のポイントのイメージがわくように、要点の解説をなるべく簡略化して示しました（**英語を話すときに、英語の文法の説明など必要ない**ですから、ややこしい文法の理論や説明は省きました）。

皆さんのほとんどは言語学者になるわけではありませんから、すばらしい文法書にあるような説明を理解していくなくても構いません。そこにあるのは、90%が日本語の情報です。

それよりも、簡単なイメージと一緒に、いつでも使える例文パターンを自分の中に持っていることが最も重要です。

1点加えるとすれば、「文法の知識」よりも大切なのは、なるべく幅広い単語を身につけることです。

知性は言葉に宿ります。

話は、言葉が豊富なほど面白くなります。本書で取り組む基本パターンを身につけ、**豊富な語彙と自分の考え方**を持っていれば、内容ある会話ができるようになります。

2013年から、中学英語の学習指導要領が1200語になります。実はこの1200語ほどで、日常会話の80%の単語をカバーできているといいます。本書を手にしている皆さんには、おそらくそのくらいの語彙力はあることと思います。そこから先は、自分の興味がある分野や、自分の仕事に必要な単語をどんどん加えていけばいいのです。

本書をやると できるようになるもの

本書をやり遂げれば、必ず会話の基礎ができます。

だまされたと思って、1冊分のトレーニングを続けてみてください。驚くほどすんなりと英語の会話ができるようになると思います。皆さんには、アウトプットのトレーニングをしてこなかった（できていなかった）だけなのです。

さらに、本書の英語は「英会話の良質な部品」です。

トレーニングによって自由自在に部品を取り出せるようになれば、文章同士を有機的につなげて、より高度な発話ができるようになります。

繰り返します。

簡単すぎるとばかにせず、だまされたと思って続けてください。

ぜったいに英会話ができるようになります。

次に、本書でのトレーニングの方法（トレーニングメニュー）を詳しく記しました。わかっているとは思っても、必ず一度は目を通してください。上達のためのさらなるポイントが理解できると思います。